大学生のアレキシサイミア傾向の変化に関する検討

— ストレスイベント時と現時点におけるレトロスペクティブ研究 —

○吉田一生¹・依田麻子²

(¹日本大学大学院文学研究科・²日本大学文理学部)

キーワード: アレキシサイミア、ストレスイベント、大学生

A study of alexithymia in terms of its variance in a sample of college students.

Issei YOSHIDA¹ and Asako YODA²

(¹Graduate School of Literature and social sciences, Nihon Univ., ²College of Humanities and Science, Nihon Univ.)

Key Words: alexithymia, stressful event, college student

目 的

Freyberger(1977)は、過度にストレスフルな状況下におかれた者に二次的に確認されるアレキシサイミア特徴を二次的アレキシサイミア(secondary alexithymia)として報告し、その後の経過によって消失するタイプ(acute secondary alexithymia)とそのまま慢性化するタイプ(chronic secondary alexithymia)に分類した。この二次的アレキシサイミアは、通常認められる性格特性的な一次的アレキシサイミア(primary alexithymia)とは区別されるものである。本研究では、過去に経験したストレスイベント時及び現時点のアレキシサイミア傾向を、Gotow Alexithymia Questionnaire: 以下 Galex(後藤・児玉・佐々木, 1999)を用いて、一時点のレトロスペクティブな質問紙調査法によって測定した。そこで、以下の2点から、過去におけるストレスイベント時点でのアレキシサイミア傾向の、現時点での変化を検討することを目的とした。

- 1) 過去のストレスイベント時と現在のアレキシサイミア得点の違いを Freyberger(1977)の概念に沿って分類すること。
- 2) Galex アレキシサイミア質問紙の構成因子別にアレキシサイミア傾向のタイプ別出現率を比較、検討すること。

方 法

調査対象者: 都内の大学生 109 名(男性 46 名、女性 63 名、平均年齢 19.96 歳、 $SD=1.05$) のデータを分析対象とした。
質問紙: 調査に使用した質問紙は 2 つのセクションによって過去—現在のアレキシサイミア傾向を測定する構成とした。セクション 1 は現在のアレキシサイミア傾向、セクション 2 は過去のストレスイベント時のアレキシサイミア傾向を測定するものであった。過去におけるストレスイベントは、自分にとってできるだけ主観的な負担度が高かった出来事を想起するよう指示した。アレキシサイミア傾向の測定には Galex を用いた。Galex は 16 項目(1: 体感・感情の認識表現困難因子 8 項目、2: 空想・内省因子 8 項目)より構成され、7 件法でアレキシサイミア傾向が測定される。本研究では、両 section 共に Galex を用いた。また、過去のストレスイベントの記述及びその際の主観的な負担の程度を 10 件法で求めた。

結果と考察

セクション 2 は、過去におけるストレスイベント時を想起してもらい、回答を求めた。その際の主観的負担度の平均値は 8.4 であったため、回答者は指示に従い主観的につらかった出来事を想起していたと考えられる。調査対象者を Galex の構成因子別に、セクション 2 (過去のストレスイベント時)とセクション 1 (現在) の Galex 得点の変化から 4 つのタイプに分類し、Table1 にまとめた。さらに、Galex 得点の変化を、Freyberger(1977)の概念に沿って、各タイプを次のように解釈した。

タイプ 1: 2 つのセクションにおける Galex 得点が高—高の変化を示した者→ 一次的アレキシサイミア or 二次的アレキ

Table1 因子別にみたアレキシサイミア傾向のタイプ別分布 ($N=109$)

感情認識言語化困難	度数	比率
タイプ1(高—高)	19	17%
タイプ2(高—低)	10	9%
タイプ3(低—高)	10	9%
タイプ4(低—低)	70	64%
空想内省困難		
タイプ1(高—高)	25	23%
タイプ2(高—低)	6	6%
タイプ3(低—高)	4	4%
タイプ4(低—低)	74	68%

シサイミア (慢性)

タイプ 2: 高—低の変化を示した者→ 二次的アレキシサイミア (一過性) 傾向者

タイプ 3: 低—高の変化を示した者→ 二次的アレキシサイミア (一過性 or 慢性) 傾向者

タイプ 4: 低—低の変化を示した者→ 非アレキシサイミア傾向者

以上の結果から、アレキシサイミア傾向者では、タイプ 1 に分類された者の方がタイプ 2、タイプ 3 に分類された者よりも多いという点が両因子において共通していた。このことは、性格特性的にアレキシサイミア傾向を保有している者と、状況依存的にアレキシサイミア傾向を発現させた者とは、本研究においては前者の方が多く存在していた可能性を示唆している。また、アレキシサイミアの構成因子とアレキシサイミアのタイプに関連性があるかを確認するため独立性の検定を行ったところ、有意な関連性は見出せなかった($\chi^2=4.50$, $df=3$, n.s.)。このことから、Galex のアレキシサイミアの構成因子である感情認識言語化困難及び空想内省困難の両因子とアレキシサイミア傾向のタイプの出現率との間には有意な差はないことが示された。

本研究では、一時点によって現在の状態と過去のストレス時の状態に関する回答を求めた。各調査対象者の現在のストレス状態や気分状態には個人差があると考えられるため、過去のストレスイベントに関する評価がその影響を受けていた可能性は否定できない。しかし、過去のストレスイベント時においてアレキシサイミア傾向が高かった者は、その後も、同様の傾向を持ち越している者がそうでない者よりも多く存在する可能性が示唆された。

引用文献

Freyberger, H. (1977). Supportive Psychotherapeutic Techniques in Primary and Secondary Alexithymia. *Psychotherapy and Psychosomatics*, 28(1—4), 337—345.

後藤和史, 小玉正博, & 佐々木雄二(1999). アレキシサイミアは一次元的特性なのか?—2 因子モデルアレキシサイミア質問紙の作成—. 筑波大学心理学研究, 21, 163—172.